Title	神の国と青年
Author(s)	古屋，安雄
Citation	キリスト教と諸学 ： 論集, Volume21 : 36-56
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2822
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

神の国と青年

古屋安雄

序論

数ヶ月前に、今日お話をするということを阿久戸学長から頼まれたのですが、確かその時は、「青年伝道とこれからの教会と大学」ということで話をしてくれということでありました。それが共通のテーマかと思っていたのですが、ここには何も書いていません。しかし、そういう題を与えられたので、私は「神の国と青年」ということでお話しすることになったわけです。

「神の国」というのは、マルコによる福音書によれば、イエスの伝道の第一声であります。イエスが神の国のことについて多くのたとえ話で話をされたということは、皆さんよく知っていると思いますが、現代のたとえ話でいうとどういうことなのかということを前から考えていました。私が一九五五年にヨーロッパに行きました時に、異口同音に皆が「神の国が来た」というイエスのこの第一声は、ちょうどDデーのようなものだということを、ヨーロッパの人から聞かされたのであります。これは、一九四四年の六月六日のノルマンディーに連合軍が上陸した時の話

です。これは、アンネ・フランクの日記なんかにも出ていますが、その連合軍十六万人の兵隊が、一万五千の飛行機と、それから六千の舟艇でノルマンディーに上陸したという、特別ニュースの放送がＢＢＣであった時のことです。皆がそれを聞いた時に、もちろんヨーロッパはそれまでヒトラーの支配下にあったのですが、もうこれで勝利が決まったのだ、連合軍の支配が始まったのだと言って、非常に喜んだという話です。それから、すっかり生活も変わってきたのですが、そのことを、皆が、神が近づいたというのはそういうことじゃないかということを言ってくれました。

そのことから、私は「神の国」ということに非常に関心を持っていたわけですが、一九六五年には、アルバート・シュバイツァーがアフリカで亡くなった時に残した遺稿は、『神の国とキリスト教』という最後の本でありました。その中で彼が「キリスト教というのは、神の国の到来を述べ伝える宗教である」ということを彼は言っているのです。彼の生涯そのものが、まさにそのことを生きたのでありましたが、そのことから、私は「神の国」ということが非常に大事だということを思っていたわけです。しかし同時に、このマタイを読んでいただいたのは、これは皆さんご承知のように、富める青年の話です。富める青年が、「永遠の命を得るためにどうしたらいいのだろうか」とイエスの所に来た時に、イエスが言われた話です。この時に、富める者、金持ちは天国に入ることは非常に難しい。らくだが針の穴に入るより難しいのだ、というようなことを言ったのです。私はそれで、どうも今の日本の青年というのは、結局この富める青年と同じじゃないか、と思いました。で、イエスが、結局これは人間的にはほとんど不可能だ、しかし、神には可能だということを言われたわけですが、それで、この二つのことを始めに読んでいただいたわけです。こういう観点から、「青年伝道とこれからの教会と大学」、この問題について私の意見を述べ、そしてそのことをきっかけにして、皆さんに議論をしていただきたいと思っているわけです。

一、信仰の平均寿命は二・八年

私たちに与えられている問題は、なぜキリスト者が国民人口の一％を越えられないのか、という問題であります。これは明治時代から、一四〇年近くなっているわけですが、しかしそれでも一％を越えられないという問題です。なぜ、これだけ日本が近代化しているのに、また隣の韓国では三〇％がクリスチャンだといっているのに、日本は一％にしかならないのだろうかという問題です。この問題はもちろん、青年だけの問題じゃありません。日本全体の問題です。特に、この信仰平均寿命が二・八年と、もう、信じられない統計が出ていますが、これは、洗礼を受けてから数週間であるいは数ヶ月、数年でやめちゃう人がとても多いからです。この間も、ある大学の先生が私の本を読んだというので送ってきたのですが、それを見たら、教授の中に、自分もそうだけども、かつて学生時代にクリスチャンだったというのがかなりいるというのです。まさに二・八年っていうのは誇張でも何でもないと思うんです。なぜ日本では、洗礼を受けるともう卒業なのでしょう。なぜ卒業信者、あるいは隅谷三喜男さんは中退信者って言っていますが、なぜやめちゃうのですか？　これが一番の問題です。だから、さっぱり増えないのです。洗礼を受けたと思ったらやめちゃうのです。だから一％を越えられないという、そういう問題があるわけです。

私はこの問題は、それこそリバイバル運動が必要だと思っています。リバイバルっていうのは日本でいうと何か伝道集会みたいなことをいっていますが、リバイバルっていうのは文字通りに「復興」ってことです。かつて、子どもの時に教会に行った時に洗礼を受けて信仰を持った。それが大人になってなくなっちゃった。それが、リバイブする。だからリバイバル集会なのです。それを日本では何か伝道集会みたいなことをそう呼んでいますが、初め

ての人にリバイバルもないじゃないですか。だから私は、本当にリバイバル運動をやってないということが、やっぱり日本の問題だろうと思うのです。そういう、洗礼を受けたような人たちが、なぜリバイブしないのですか？だから本当の意味でのリバイバルというのが必要だというふうに私は思っています。

さてなぜ青年が、教会に来なくなったのかというこの問題は、実は新しい、最近の問題です。これはご承知のように、七十年代、八十年代になってからの問題です。ご承知のようにかつて日本の教会は、青年の教会とか、あるいは学生の教会というふうに呼ばれていた教会です。会衆の半分以上は学生でした。今じゃ、もうほとんど年寄りばっかりです。なぜ、青年は来ないのか。どこの教会へ行ったってそうです。私はいろいろの教会を回っていますけれども、ほとんどおじいさん、おばあさんですね。青年はほとんどいない。いても一人か二人。しかも、それも長続きしない。青年がいるのは非常に珍しいというので、何でもやらせる。だから青年は来なくなる。だから、おじいさんとおばあさんばかりで、平均すると、二十人切っているでしょう。で、こういう現象がいつごろから現れたのかということは、先ほど言いましたように、六十年代の後半、それから七十年代になって、それから八十年代になって非常にはっきりしてきたと思いますが、これがいわゆる大学紛争と教会紛争の時代です。このことと、私は青年が来なくなったということとは非常に関係が深いと思っているのです。

二、大学と大学生の質の変化の問題

実はこのことについては、日本の大学生の質が変わってしまったと、学生の変質の問題として、私が取り上げたものです。大学の学生が変わってきたということは、トロウというアメリカの教授が言っていることですが、学生

人口の進学率が、同時代の十八歳人口の一五％を越えると、エリート大学からマス大学、大衆大学へと変質すると言っています。これが日本で起こったのが、一九六六年、すなわち昭和四十一年です。一九五四年にはまだ十％だったのですが、それが二十％を越えたのが、大学紛争が始まった一九六八年であったというふうにいわれているわけです。それから学生が、変わってしまうのです。それまで学生っていうのは、一目で見ても、大体分かりました。しかし今じゃ、分からないのです。学生なのか普通の青年なのか分かんないのです。そのくらい、大衆化しちゃって、現在ではご承知のように四十％、しかも少子化の問題がありますから、選ばなければどこの大学でも入れると、そういう時代になってしまったのです。誰でも行く所になったのです。こういったことと、それとまた日本の経済の高度成長と、すなわち、豊かな社会、アフルエント・ソサエティになったっていうことと、私は無関係でないと思っています。人が金持ちかどうかということは、非常に相対的なことです。自分たちはそうでないと思っても、しかし世界的に見たら日本の大学生、あるいは日本人っていうのはほんとに金持ちです。こんなに立派なチャペルがあるのですからね。それくらい、金持ちになっているのです。それが、ぴんと来ないかもしれないけど、まさにそのことに、この問題がよく現れているように思うのです。だから金持ちの子どもが、青年が神の国に入るということは、ほとんど不可能なのです。

そのころから、大学のレジャーランド、いわゆる遊園地化ということが始まります。かつては大学という所には真理探究に来たとみんな言っていた。先生もそう言ったし、学生もそう言った。ところが、今はそんなことを言うと、しらけちゃう。真理探究ではなく利益の追求に来ているのですから。就職のために来ているのです。特に最近の大学は、だんだんそうなってしまいました。大学という所は、かつての真理探究なんて、そんな高尚な所ではないのです。そのことを、まず認識する必要があります。私は、かつて調べたことがあるのですが、戦争の終わった

時に、高等学校、専門学校、全部入れて、その時の教授が五千人です。そして、学生が十万人いました。ところが、今は、十二万人の大学の先生がいるんです。ということは、あの時の、戦後の、落第生も含めて全部が教授になったんです。教授が変わっちゃったんですから、学生が変わるのは当たり前です。ですから、学生は大学に入ったら、それこそ部活動に一生懸命になるわけです。それからまた、遊ぶわけです。しかも、真理が相対化されるので、倫理も相対化されるわけです。それで、テレビ文化、文字文化が終わってテレビ文化が起こったと言われていますが、学生の文字離れがそれから非常に進むわけです。マンガ以外の書物を読まなくなる。これはもう、今電車に乗ったって分かるでしょう。四十、五十のいい格好したおじさんたちが、マンガ読んでいます。いや、神学生もそうなのです。神学生も、読まない。いや、牧師も読まなくなりました。

これは、神学書を売って歩いている人が私に言うのですが、牧師がこのごろ本を読まない。特に難しい神学書なんて読まない。ということは、かつてのように本を読んで、それで人生問題を考えるなんていうことはないのです。日本では就職難というふうに言っていますが、しかしフリーターが多いとか、ニートがいっぱいいるとか、そういうことを言っているのは、日本がやっぱり金持ちの国になったからです。富める国になったからです。ところが、聖書はちゃんと、「貧しき人々は幸いである」と言っているのです。私は時々東南アジアに行きますが、貧しい人たちで、ほんとに教会はいっぱいです。日本みたいに、ガラガラじゃないのです。本当に貧しい所に行けば行くほど熱心です。あれ見ると、やっぱり「貧しい人々は幸いだ」とイエスが言ったっていうのは本当だな、と思います。貧しい人々は、求める。富める人は、求めないのです。

だから、人生のいわゆる内面的な問題に悩んで、教会に来るっていうことは、もうないのです。非常に少ないのです。かつての自我の問題、高倉徳太郎は「最も愛するものは自我だ」ってことを言ったというふうに知られてい

ますが、そういう自我の問題。特にその中での肉欲、あるいは性欲の問題ですね。これは、荒井献君が最近『「強さ」の時代に抗して』（岩波書店）という本の中でも書いていますが、なるほど、昔やっぱり結核が多かった。と同時に、性欲のことで悩んだ。しかし今の若い人たちは、そんなことで悩まない。性欲は、罪でないのです。これはむしろ精神分析、心理学、あるいは性科学の影響で、むしろ自然的な生理現象だっていうふうに捉えるようになってしまったのです。だから、そういうことで悩んで、かつてローマ書七章にあったような、「あぁ、我、悩めるかな」っていう惨めな人間意識や罪意識っていうのは、そういう意味ではほとんどなくなっちゃったのです。これが、今の問題です。だから、青年が来ないのです。昔は、黙っていても来た。幸か不幸か、結核がそのころは多かったから。それで、みんな、性欲で悩むのです。それで、そういう問題を何とか解決しようと思って、教会に来ていたわけです。ところが、今の学生たちは、そういうことは全然、そういう深い深刻な悩みというのはなくなっちゃったのです。昔の学生は、人生五十年といいましたし戦争に行くということもあったから、死ということが非常に大きな問題だった。死を考えることが宗教の問題だというふうに思っていたのですが、今はあんまり死を考えてないんじゃないか。むしろ、生きることを考えている。しかし、生きる意味が分からない。そういう時代なのです、今は。

したがって、学生たちの関心、青年たちの関心というものは、内面的な問題よりも外面的な問題となっていくのです。すなわち、政治や社会の問題が非常に関心になるわけです。アメリカなんかでもそうでしたけども、日本でも公民権運動やベトナム反戦運動っていうことが非常に大きな学生の関心となり、それが日本においては大学内で管理体制とか教会内での万博問題や戦争責任問題っていうのがクローズアップされてくるのです。この対応を巡って、キリスト者学生とキリスト教大学の当局が対立するようになったということは、相次いで、ほかの学校でもみんなそうでした。そのころは、幸か不幸か、聖学院はまだ大学はなかった。だから、ここではあんまり問題ありま

せんでしたけど、ほかの所はみんなそれで悩んだわけです。私も国際キリスト教大学（ＩＣＵ）でこの問題にぶつかりました。

三、教会の問題と「神の国」

この問題は、教団ではご承知のように、当局と造反牧師、あるいは神学生との対立となりますが、その結果、教会派と社会派とに分裂してしまうのです。この中にも社会派の人がいるかもしれませんが。二つに分かれちゃった。私は、そのことは非常に象徴的だと思っています。なぜ、教会派と社会派とに分かれたのか。それは、「神の国」を言わないからです。教会派といわれている人たちは、普通はいつも教会形成が一番大事だといっているんです。しかし、この教会形成が自己目的化して、教会となるということが一番大事だということになって、社会の問題よりも教会の問題になっちゃうのです。だから、自己目的化した教会というものは、私は神の国じゃないと言っているのです。神の国、すぐただちに社会の問題じゃないのです。もっと広いのです。世界の問題なのです。ところが、日本の教会においては、神の国っていうことをいうのは、これは明治以来あったそうですが、少数派です。このことは、先ほどの賛美歌の作詞者でも由木康という牧師さんのキリスト教の三類型に明白です。第一がイエス型。これが、神の国を非常に強調するのですが、これを強調したのが、賀川豊彦です。第二にパウロ型といわれているのが、信仰義認を非常に強調した内村鑑三です。ぼくも実はいろいろ調べてびっくりしたのですが、内村鑑三っていう人は、四十巻くらいの全集が、今でも岩波書店から出ていますが、あれだけ物を書いた人でも、神の国についてはほとんど書いてない。第三の牧会書簡型というのが、いわゆる教会形成を強調しているもので、植村正久がその

代表だと、こう言うのです。この三つの類型を見ても、なるほどそういえば日本では神の国ということはあまり言われなかった、ということが分かるだろうと思います。

教会派が、神の国よりも教会形成を強調するので、この反対派は社会派となる、あるいは社会問題と直結してしまうわけでしょう。結果的には社会問題の解決の一派、あるいはそのイデオロギーと結びつきやすくなるわけです。そこで学生一般というものが、しかもこれは先ほどから言っているように、貧しいんじゃなくて富める青年ですから、その青年たちが、自己閉鎖的な教会派にも魅力を感じないし、また逆にイデオロギー的な社会派にも魅力を感じなくなる。だから、教会に来ないのです。

六十年代以前の、紛争の前の神学的な神学の教育を私たちは受けたわけですが、これは、カール・バルトと、それからルドルフ・ブルトマン、それからラインホールド・ニーバーというような人たちでありますけども、しかしそういった人たちは、いろいろな理由で、神の国についてほとんど言わないのです。今日は時間がありませんから、そのことを詳しく言えませんが、いずれにしても、その人たちは神の国っていうことを言わない。非常に若い時は、みんな影響を受けているのですよ。受けているけれども、第一次世界大戦後、言わなくなっちゃうのです。特にここで書きませんでしたが加えたいのは、実は、高倉徳太郎という、植村正久の跡を継いだ人です。高倉徳太郎の信濃町教会での献堂式の礼拝が、一九三〇年、昭和五年に行われましたが、その時の説教題が何と、「神の国と教会」っていうのです。そして教会は、すべからく神の国の牙城でなければいけない、という勇ましいことを言っているのです。ところが、翌年から全然言わなくなる。なぜか？　翌年から満州事変が始まった。そして十五年戦争が始まった。そうなってくると、日本の牧師たちも皆黙っちゃう。神の国を言わない。その前に神の国の運動で、やっぱり青年をとらえたのは、ＳＣＭ（学生キリスト運動）がありました。これはほとんどみんな忘れていますけども、

その当時非常に盛んでした。学生が中心でしたが。東京でも、それから関西でもそうでしたが、頭のいい優秀な連中は、神の国なんてことは考えるのです。ところが、それはみんな潰されちゃうのです。日本全体が、そういうマルキシズムや社会主義なんていうのは危険だというわけで、解散することになったのですが、それと時を同じくして、日本の教会も全然言わなくなっちゃうのです。だから、ちょうどバルトの神学が盛んになるっていうのは非常にいいのです。都合がいいのです。神の国は言わないから。神の国のことを言わないということは、社会のことはどうでもいいってこと。超越的なこと言ってくれればいいのですから。だから、我々の先生たちは、みんなそれでバルト神学になっちゃったわけです。それで、結局戦争に協力・妥協したのです。そして、教会形成っていうことだけを言うようになってしまったわけです。もともと日本っていう国は、神国日本なのです。そういう国なのです。これは、十四世紀の北畠親房っていう人が『神皇正統記』の中で、南朝のほうですが、「大日本は神国なり」と言っているのです。それ以来、ずっと続いているのです。この間の、前の総理大臣の発言と同じですよ。日本人はそう思っているのです。日本というのは特別だと思っている。天皇を中心とした、神国なのです。神国日本というのは、日本は神の国だということです。そのことを知っているから、やっぱり日本のクリスチャンは言わないんです、神の国と言わないのです。まずいのです。といっても現在あなたたちも、どのくらい神の国のことを説教していますか。ほとんどしてないでしょう。教会っていうようなこと言っていれば安心だと思っている。神の国って言うと、神国日本とすぐぶつかっちゃうのです。明治六年に、ご承知のようにキリスト教、キリシタンの禁教の高札がなくなりますが、その時にはっきり書いているのです。「日本は神国なり」って書いてある。そういうことが、日本人の潜在意識にあり、徹底しているのでしょう。神国日本だっていうふうに信じている日本人に対して、神の国を言おうとするから、言ったらぶつかっちゃうんです。だから、言わない。だから、伝統的に、そういう神の国について

言えなくなるわけです。また神の国を深く考えないで言うと、これが日本の膨張主義、帝国主義と結びついちゃうのです。戦時中皇国運動というのが教会で起こりましたけども、これと同じです。だから、神の国をどういう形で言うかっていうことが非常に難しい問題になると思います。いずれにしても、日本では伝統的に神の国っていうことを言わない神学が強かったわけです。そして、その教会派が強くなって、その反動としての社会派が生まれてきたというふうに私は見ているわけです。

そういった間に、学生のほうというか青年のほうは全く変質してしまいます。アメリカの平和部隊(Peace Corps)が出来たのが、一九六一年です。これは海外に出かけていって、困った人たちや貧しい人たちを助けようという運動です。これは実は、ケネディ大統領が言っているように、十九世紀の海外伝道の世俗版です。日本でもそのまねをして、青年海外協力隊というのが一九六五年ごろに始まります。ところが、日本の教会は、もともと神の国ということを言わないし、海外に対して全然関心を持っていませんから、日本の教会はそれに応じたプログラムを全然持ってないわけです。ところが、ご承知のように、一九九五年の関西大震災の時に、初めて日本のボランティア元年というふうにいわれていますけども、その時、多くの青年たちが皆出かけていったんです。にもかかわらず、教会にはそれに対応したものを全然持ってないわけです。韓国の教会は、今人口の約三十%ですが、それでも一万人の宣教師を世界中に送っているのです。ロシアやアフリカなんかに、みんな送っている。日本から何人行っていますか？　ほとんど行っていません。あなたがただって、みんな海外に全然関心ない。だから、教会にそういったものは、全然ないのです。

四、教会と青年

ところが、今の学生たちはそうじゃない。このギャップが、ぼくは問題あると思うのです。今の学生たちは、かつてのように観念的でないのです。本を読まないのだから。そうじゃなくて、マンガを読んでいるし、テレビを見ているし、それで実際的、あるいは経験的だっていうふうに私は見ているわけです。先ほど松本のぞみさんが映画の話をしたでしょう。今の学生は、本よりも映画を見ているのです。だから、ペテロの話なんてすぐ分かるのです。ペテロなんていったって、我々は聖書から学ぶのですが、今の人たちは、映画を見てペテロを知るのです。

これは私の学生でもあったわけですが、今は関西学院大学の教授をしている栗林輝夫氏が、最近『シネマで読む旧約聖書』と『シネマで読む新約聖書』っていう本を書いた。これはものすごく売れているのですよ。彼が学生たちに聞くと、学生たちに聖書を読めと言ったって読まない。しかし、「あの映画で見ただろ？　モーセの十戒。あれは旧約聖書に書いてあるのだ」なんて言うと、読むのです。今は、そういう時代です。かつて、我々はモーセの十戒とか何とかっていうと本を読んだりして、バルトやティリッヒなんか読んで、それから行ったけど、今の学生はそうじゃないのです。まず映画で知るのです。だから、『シネマで読む』。映画の話をすると、目をぱっちりと開ける。あとは寝ているのです。したがって、私のこれは経験でもありますけども、ワーク・キャンプなんかに非常に関心を持つのです。かつて私たちは、教会の青年会っていうのに集まって、そこでバルトやブルトマンというような難しいものを読んでいました。今は、全然読まない。ぼくは覚えていますが、ＩＣＵ教会の聖歌隊、聖歌隊のメンバーでさえ、バルトの『ローマ書』を読んだんですから。今、そんな聖歌隊はありますか？　ないですよ。とこ

ろが、ワーク・キャンプには行くのです。

これもＩＣＵでの経験ですけれども、ＩＣＵという所は日本の普通の学校よりもインターナショナル、国際的な事、海外の事を強調しますが、しかし、あるとき卒業した学生が、大学の国際関係の講義よりも、自分にとって非常に意味があったのは二週間のタイのワーク・キャンプだったっていう話をしたことがあるんです。それを聞いた大学の先生たちはがっかりしましたけど大学牧師は喜んでいました。全然キリスト教に関心を持たないのが、タイの、カレン族のクリスチャンの素朴な信仰を見ていて、「キリスト教って何だろう」って考える。それから、キリスト教に関心を持つのです。この間、ＩＣＵでも、ここと同じようにＣ―ＷＥＥＫという、キリスト教強調週間がありました。聖学院なんかとは違って、ＩＣＵではＣ―ＷＥＥＫというのは全く自由参加です。だから、よく分かると思うのですが、Ｃ―ＷＥＥＫの一つの基調講演として第一回生の川田殖（しげる）氏を呼んだ。この人はＩＣＵの卒業生でギリシャ古典なんかを教えた人です。京都大学に行って、それからそのあと紛争でＩＣＵを辞めて、それから恵泉女学園の園長なんかやって、今聾唖学校の校長をしていますが、川田君を呼んで話をしてもらっても、百六十人しか来ない。ところが、中村哲さんっていう、アフガニスタンで医療活動をしている人の話の時には三百二十人来るのです。これは、ぼくは非常に象徴的だと思うのです。ＩＣＵの学生だから、まだ本を読んでいるほうです。それでも川田君の話には、百六十人しか来ない。ところが三百二十人の人は、中村さんのほうに来る。ということは、結局、昔のタイプの学生は、三分の一くらいしかいない。三分の二は、非常に経験的なのです。ばかじゃないですよ、けれども彼らもあんまりそういう、古典とか、そういうことに関心はない。

私は最近までアジア学院の理事長をしていましたが、そこには一年に千人以上のキャンパーが来ます。これは、全国の学校やキリスト教学校や教会から来るわけですが、ああいう千人の学生たちは、なぜ来るのか。我々の時代

とは違うのです。生まれて初めて土をいじる。それまで土を知らないのです。あなたがたもそうでしょう。にわとりなんていうのは、スーパーかコンビニにあると思って、食べています。ところが、あそこに行って初めて、にわとりが卵を産んで、そのにわとりを殺して食べることを知るのです。アジア学院に行って、初めて自分で卵を取って、それで殺す。殺さなきゃ生きていけないということを知るんです。その原始的な経験が、非常に大事なのです。アジア学院に来て、感激するわけです。自分の大学を辞めてアジア学院に来たい、なんて言っているのです。それから私は、ＡＣＥＦ（アジアキリスト教教育基金）という、バングラデッシュに寺子屋を作るのを隅谷三喜男さんが始めた団体に関係していますが、そこのスタディー・ツアー、たった一週間か二週間ですが、やっぱり、そこに行ってもですね、全然クリスチャンでない人が、向こうのバングラデッシュのクリスチャンたちに会って初めて、キリスト教に関心を持つんです。そういうワーク・キャンプなんかの経験を通して初めて、キリスト教信仰へと目が開かれるのです。ところが、教会に行って牧師さんにその話をしても、「あぁ、そう」なんて言うだけです。牧師さんに関心がないのですからね。バングラデッシュ行ってきた。「あぁ、そうなの」なんていうわけです。「アジア学院？　あぁ、そう」。この、牧師と学生たちのギャップ。このことを認識する必要があります。今の青年たちは全然先生方と違うのです。

教会がそういうことに対して無関心だということが、ぼくは問題だと思っています。ですから、教会に青年たちは来ない。お年寄りばっかりが集まる。当たり前です。今の青年は全然違うのですから。ところが、ＩＣＵ教会は別です。不思議ですね。あそこは大学の教会っていうこともあるけれども、若い人たちがいっぱいいます。小さな子どもを持った人たちが、親たちがみんな、来る。教会員の六十％はＩＣＵの卒業生です。彼らはみんな、自分たちの子どもたちを教会学校や幼稚園に送りたい。ぼくは、この間、桜台教会の歴史を見てたいら、びっくりしたん

だけれども、戦後すぐ、十年か十五年の日曜学校の写真に二百人の子どもがいるのです。今、そんな教会一つもありません。教会学校をやめちゃった教会はいっぱいありますが。来たって、せいぜい五人か十人でしょう。ところが、かつて二百人いたのです。これは、日本の教会の問題。はっきり言っちゃうと、牧師たちの意識の問題。あなたたちの問題なのです。あなたたちが変わらなきゃ、だめです。

ホームステイなんかでアメリカやヨーロッパや、オーストラリアやニュージーランドへ行った子どもたちが、向こうで初めて実存的になる、宗教的になるのです。日本にいると、うるさいくらい先生や親が文句言う、介入するわけです。ところが、向こうへ行くと全く一人です。言葉も分からない。全く一人。初めて、一人っていう経験をするのです。そこで神の前に立つのです。だから、結局は洗礼を受けるということが起こるのです。ホームステイや外国の経験で、高校生、大学生の時に海外で生活した者が、そこで洗礼を受けて、教会員となって帰ってくるわけです。しかし、帰ってきて日本の教会に行くと、全然違うのです。したがってその連中は教会に行かない。これが問題ですよ、なぜ行かないのですか？　日本の教会に、やっぱり違和感があるのです。日本の教会というのは、やっぱり、一％しかいないというけれど、当たり前だと思うのです。教会はちょっと、変わった所ですよ。良くも悪くも、変な所です。そこに集まっているのは、おかしいのです。ちょうど、アメリカに行って、アメリカ人のくせに、白人のくせに、仏教教会やヒンズー教会へ行っているのは、おかしいと思うでしょう。少なくともアメリカ人一般は、そういう目で見ています。我々、日本のクリスチャンっていうのは、そう見られているのですよ、日本人一般から。おかしいのです。しかも、牧師になっているのでしょう、あなたたちは。

ちょっと、頭どうかしてんじゃないの？　そう思っているのです。そういう人が集まっているのです。変わっているのですね。同じように日本の教会に来ると、アメリカの教会で洗礼受けた人たちが日本の教会に来た時に、違

和感があるっていうのだから、やっぱり何か問題があるのでしょう。それから、ご承知のように、キリスト教式の結婚式は非常に盛んです。おそらく統計で見たら半分以上でしょう。この間私は、ホテルオークラで司式を頼まれて行った時に支配人に聞いたら、キリスト教式は八十％です。一％のクリスチャンしかいない国が、どうして八十％キリスト教式で結婚式をやるのですか。不思議な国ですね。ところが、結婚式はキリスト教で挙げるけれども、教会に行かない。どういうことですか、これは。これは問題です。本当は来たいのです。来たいのだけど、来させないものがあるのです。この間、山形のある教会へ行ったのですが、その時、礼拝が終わったら、カップルがカメラマンを連れて三人でやって来た。十字架のところで写真を撮りたい、と、こう言うのです。式を教会でも挙げないし、ホテルでも挙げない。しかし写真だけ撮るって言うのです。しかし、礼拝には来ない。なぜ？　だから、私はここに、教会自体にやっぱり、ある問題があるのじゃないかと思っているわけです。

それから、これもアジア学院での私の経験ですが、あそこに研修生が毎年二五名くらい来ます。アジア、アフリカ、いろいろな所からです。ほとんどはクリスチャンの人が多いのですが。あの人たちが日本に来て、日本の新しい農業技術の研修を受けるということについては、私は全然疑問を持っていません。ただ心配なのは、教会です。あの近くにある教団の教会に送るわけです。そうするとみんな、何て言ったかっていうと、「あんなお葬式みたいな教会に、行きたくない」って、こう言うんです。「あそこへ行ったら、気が滅入っちゃう」って言うんです。元気にならない。教会の牧師さんがですね、「喜べ、喜べ」「神を賛美しろ」って、口では言うけども、全然うれしそうな顔してないというのです。

下を向いて、「喜べ、喜べ」と言っています。ところが、あの人たちは特に、アフリカから来た人たちは、体で喜びを示すのですね。だから、本当に、「アーメン、ハレルヤ！」と言うのです。もうちょっと、まねできないけども、

そういうふうになっちゃうのですね。本当にアフリカの人たちっていうのはリズム感がありますから、ダンスをする。旧約聖書に書いてあるじゃないですか。ダビデが踊ったことを、お姫様がばかにしたっていう話が。また、つづみで打てとか、トランペットで吹けとか、書いてあるじゃないですか。そういう詩編があるのに、教会はそういうことしないからだめなのです。せいぜいオルガンです。体を使っちゃいけないのです。それが問題ですよ。いずれにしても、あんなお葬式みたいな教会へ行く必要はない、と。あれだったら自分の部屋で、聖書を読んで、賛美して、自分でお祈りしたほうがいいって言うのです。これはちょうど、ヨハネの宗教とイエスの宗教の違いです。イエスは言っているじゃないですか。「なぜあなたの弟子は断食しないのか」って聞いたら、「お葬式の時には断食してもいいけど、結婚式の時に断食するばかがいるか」と。礼拝というのは賛美するところです。本当は喜びにあふれているところなのです。ところが、日本の教会はそうじゃない。だから、葬式のような礼拝に失望してしまうのです。

しかし、なぜ逆に日本の教会にはそういう福音の喜びがないのか。このことについて私は、明治時代の武士気質と関係があると思っています。このことについては、いろいろ数年前に書いたことがありますが、武士っていうのは、これは不思議な人種です。直接感情を表現しちゃいけない。「武士は食わねど高楊枝」です。お腹が空いているのに、食べたような顔をする。それが武士です。それが日本の教会に入っているのです。だから、うれしい時に悲しい顔する。悲しい時にうれしい顔するのが日本の教会です。そういうのが、みんな教会に集まっちゃう。だから、直接そういう感情を表現しちゃ、いけないのでしょう。だから、そこで神の国の到来を言わないところの十字架の贖罪のみの説教ばっかりになっちゃったのでしょう。

神の国の到来なき十字架の贖罪だけを言う教会になっちゃったのです。だから、青年たちが生きるっていうこと

はどういうことか、どのように生きるかっていうことを聞きたがっている時に、十字架の話とか、罪の話とか、死とか、そういうことばっかり言うのです。だから、来ない。高齢者っていうのは、もう死が近いんのですから、そりゃ高齢者は来ます。しかし、青年は来ない。

五、神の国の宣教と青年伝道

私は、十字架と神の国っていうのが、あれかこれかの問題じゃないと思っているのです。神の国を、イエスは言ったからこそ、十字架にかかったのです。それでまた、十字架っていうのは神の国についての本当のクライマックスです。だから、私はこのことが矛盾していると思わないのですが、日本の教会は、だんだんあれかこれかっていうふうに考えちゃったわけです。先ほど言いましたように、神国日本という考え方とぶつかると思って言わないのです。しかし、教会が神の国、あるいは山上の説教を強調しなくなると、十字架の赦罪とか贖罪とかいうようなことは、これはボンヘッファーの言葉ですが、「安価な恩寵」になっちゃうのです。Cheap grace になっちゃうのです。いいですか？　あれだけキリストの十字架について語っているドイツでヒトラーが出てきたのです。イギリスのマグラスっていう人が『十字架の謎』なんて書いているし、彼はルターから学んで、十字架の神学がどんなにすばらしいかっていうことを学んだ。だけどもしかし、十字架のことをいくら言っても、ヒトラーは出てくるのです。なぜ出てきたのですか？　ボンヘッファーはご承知のように山上の説教を非常に強調しました。それから六十年代にアメリカでマルティン・ルーサー・キングが出ました。公民権運動を指導した。あれは、アメリカの白人の教会が、黒人たちをみんな差別するからです。キングは自分が夏の暑い時に、ミシシッピーやなんかで、すばらしい白

い塔のある教会を見たとき、どんな神さまを礼拝しているのだろう、と自問した。そこの教会でやはり、「隣人を愛せよ」とか、「イエス・キリストの十字架の贖罪」と語っているのです。それなのに人種差別をやるのです。なぜ？

神の国がこの地上で始まった。私たちはそのことを願っているし、またそのことがみ心になるように、と祈っているのです。でも、実際全然やってない。だから、キングが出てくるのです。ボンヘッファーは殺された。キングも殺された。ふたりとも四九歳です。なぜ？　両方ともキリスト教国です。

現代の日本の青年は、生きる意味を見失っている。生きるっていうことが分からない。生きる意味が分からない。しかも、それを観念的にではなくて、経験的にそれを求めているんです。だから、聖書研究会には来ないけれども、ワーク・キャンプには出るのです。そこで海外を見て、アジア学院なんかに行って、そこで初めて原初的な「生とは一体何なのか」っていうことが分かる。分かってくると、みんな、「あぁ、そのためにやろう」と思うわけです。そこで初めて、生きる意味は自分のためではなくて、隣人のために、貧しい人たちのために生きることだっていうことを知った時に、初めてそこで生きるっていうことの意味が分かってくるんです。今の若い人たちに、どんなに「神さまがあなたのこと心配している、愛している」なんて言ったって分かんない。日本にいたら分かんない。外国に行って初めて、貧しい、そして豊かということが分かるのです。外へ行った時に、初めて分かります。だから、初めて外へ行って、自分を見出すのでしょう。そこで重要なのは、彼らが帰ってきた時に、教会がそれを受け入れられるかどうかっていうことです。自分のためにだけ生きるということを考えている時に、やっぱり、生きる意味は分からないでしょう。初めて、隣人のために、世界のために生きるっていう時、初めて分かるのです。だから、教会が神の国のための存在であるということを語り続けている時に、初めて青年たちは教会にもっと来るようにな

るだろうと私は確信しているのです。そして、その時また、そこで初めて十字架の意味、十字架の贖罪愛が分かってくるのです。神の国を来たらせようっていうことを考える時に、人間というのはそんな簡単なものじゃない。聖書でいう罪人。自己中心的な生き方しかやってない。そのことを教えるのが、やっぱり教会なのです。その場合にやはり、社会がどうなっているかということを牧師たちが知らないで言ったって、それはもう、抽象的になっちゃうんです。今の学生たちには抽象的な話は分からないのです。そういう意味で、私は、神の国っていうことをもう一度考え直す必要があるのじゃないかと思っているのです。

毎日曜日の礼拝で、私たちは「主の祈り」を祈っています。あの主の祈りの中に、神国日本なんて言葉は出てきません。主の祈りで、毎日祈っているじゃないですか。「御国を来たらせたまえ」。神の国を来たらせたまえっていうことは、どういうことですか？　イエスが言ったように、神の国はもう既に、Already 来てるんです。だけどまだ、完成してない。Not yet。AlreadyとNot yet、この両方の間にあるのは中間です。そういう意味でアルバート・シュバイツアーは言ったのです。この中間時にイエスに従うことはアフリカに行くことだと思ったのです。だからアフリカへ行った。バルトは、『和解論』の中で「キリスト教倫理」について語っていますが、その中に、「生への畏敬」というシュバイツアーの使った言葉をそのまま主題とした所があります。その最後の所で言っています。「神学的にはシュバイツアーは間違っている」と。けれども、「最後の審判で神さまが自分に聞くのは、何冊のキリスト教のドグマティックを書いたかじゃない。〝お前はあのシュバイツアーのように、アフリカのお腹空いた人たちのために、一杯の水をやったか、ご飯をあげたか〟と聞くだろう」。とこういうのです。あなたたち牧師さんが、どれだけ説教をしたかっていうことではないのです。大事なことは最後に羊になるかヤギになるかどっちかという話です。そこで言っているのは「〝主よ、主よ〟と言う者は、ことごとく天国にいることあたわず。全然主を知らなくても、

牢屋に行った時に自分を訪ねてくれた。その人たちは神の国に入るだろう」って言っているのです。いずれにしても、我々は毎日曜日、祈っているじゃないですか。「御国を来たらせたまえ。み心の天になるごとく地にもなさせたまえ」と。このような我々が、神の国に対して全然責任がないって、どうして言えますか。私は教会が、神の国っていうことを本当に真剣に考えるようになった時、説教した時に、その時に初めて青年は戻ってくるだろうと、そう思っているわけです。ご清聴、どうもありがとうございました。

（二〇〇五年六月二二日、「教会と学校の懇談会」における講演）